社会福祉援助技術論A

単位数	履修方法	配当学年
2単位	R or SR	2年以上

科目コード	CE3071	担当教員	川口 正義

※この科目は、2009年度以降入学者に対して開設されている科目です。2008年度以前に入学した方は履修することはできません。

■科目の内容

ソーシャルワーク実践は現在、これまでにない厳しい局面に立たされています。時代社会の変化と連動して、支援の対象となる「人」「問題」「状況」のいずれもが、いっそう複雑化し、既存の社会福祉制度では容易に対応しきれない社会問題、生活問題の深刻化・多様化・拡大化が進んでいます。また、援助専門職による利用者・当事者に対する「不適切なかかわり」や事故、不祥事は後を絶ちません。

さらに、援助専門職が「権利擁護」「命の尊厳」「排除しない福祉」あるいは「自立支援」等々の必要性を熱く語ろうとも、現実的に「必要とされる支援」が提供されていないと感じている利用者・当事者が、福祉サービスや援助専門職のあり方に対して疑問、憤りあるいは不信の眼差しをより強く注ぎ始めているように感じられます。

まさに「当事者の時代」が標榜されている今日的状況の中で、ソーシャルワークの理論と実践が利用者・当事者の「生活」や「生」にどれだけ接近してきたのか、あるいは接近することができるのかが問われているといえるでしょう。

また、1987年の制定後20年の歳月を経て2007年に「社会福祉士及び介護福祉士法」が初めて改正され、「実践力の高い社会福祉士」及び「総合的かつ包括的な相談援助」ができる社会福祉士が求められています。

このような時代社会状況であるからこそ、ソーシャルワークでしかできないこと、またソーシャルワークがやらなければならないことがあるはずです。本科目の学修を通して、相談援助を行う上で必要な知識・方法の修得に留まらず、自らの「ソーシャルワーカー・アイデンティティ」と「援助観」の構築に励んで頂きたいと思っています。

本科目では、以下の内容について学びます。

1．「相談援助」とは何か？―概念・構造・機能―
2．「人と環境の交互作用」とは？
3．相談援助における対象の理解
4．相談援助における「援助関係」―概念・意義―
5．相談援助の展開過程
6．相談援助に必要な技術―意義・目的・方法・留意点―
　アウトリーチ、契約、アセスメント、介入、モニタリング・再アセスメント・効果測定・評価、面接、記録、交渉

■到達目標

1）ソーシャルワークの定義、枠組み、および構成要素（特に価値、知識、技術の関係性）について説明することができる。

2）ソーシャルワークの構造と機能について説明することができる。

3）相談援助における援助関係の定義について説明し、援助関係の質と自己覚知との関係性について解説することができる。

4）相談援助の展開過程の流れ、およびそれぞれの展開過程の内容について説明することができる。

5）アウトリーチ、契約、アセスメント、介入、モニタリング・再アセスメント・効果測定・評価、面接、記録、交渉の各技術の意義と目的について説明することができる。

■教科書（「社会福祉援助技術論 B」と共通）

1）社会福祉士養成講座編集委員会編『新・社会福祉士養成講座 7　相談援助の理論と方法 I（第 3 版）』中央法規出版、2015年（第 3 版でなくても可）

2）社会福祉士養成講座編集委員会編『新・社会福祉士養成講座 8　相談援助の理論と方法 II（第 3 版）』中央法規出版、2015年（第 3 版でなくても可）

（最近の教科書変更時期） 2015年 4 月

■在宅学習15のポイント

回数	テーマ	学習内容	学びのポイント
1	相談援助とは	ソーシャルワークの定義と役割、ソーシャルワークを構成する要素、ソーシャルワークの職場、ソーシャルワーカーが所属する組織について理解する。	ソーシャルワークの定義、目的について理解したうえで、価値、知識、方法・技能の関係がどのようになっているか理解しましょう。
2	相談援助の構造と機能	ソーシャルワークの構造、ニーズ、機能について理解する。	構造については、人と環境との関係、人および社会資源についての見方の 3 点より。ニーズについては、社会生活ニーズとサービス・ニーズの 2 点より。機能については、過程と枠組みの 2 点より理解しましょう。
3	人と環境の交互作用	実践における人と環境、人にとっての環境の意味、人と環境との全体性、システム理論によるソーシャルワーク論について理解する。	ソーシャルワークの実践を「人」と「環境」を分割せずに、相互に影響を与え合う「全体としてとらえる見方」より理解しましょう。
4	相談援助における援助関係	援助関係の意義、援助関係の形成プロセスに影響する要因、援助構造、援助関係の質と自己覚知について理解する。	援助関係とはいかなるものなのか。またその形成に影響を与えるもの、および質を担保するうえで必要なものとは何なのかについて理解しましょう。
5	相談援助の展開過程 I①	相談援助の展開過程の流れを学んだうえで、ケース発見、受理面接、問題把握、ニーズ確定に至る過程について理解する。	相談援助の展開過程の全体の流れについて理解しましょう。展開過程の段階は明確に分けられるものではない点に留意して、各展開過程について理解しましょう。

回数	テーマ	学習内容	学びのポイント
6	相談援助の展開過程Ⅰ②	事前評価、支援標的・目標設定、支援の計画、支援の実施に至るまでの展開過程を理解する。	学びのポイント 5 と同様。各段階の目的と内容を、テキストのなかに記載されている一つの事例を通して理解してみましょう。
7	相談援助の展開過程Ⅱ	経過観察、再アセスメントと支援の強化、支援の終結、効果測定、評価、アフターケア、予防的対応とサービス開発について学び、相談援助の展開過程の全体を理解する。	学びのポイント 5 、 6 、 7 を通して、ソーシャルワーカーの支援の視点が、ミクロ、メゾ、マクロと展開していく様相について理解しましょう。
8	アウトリーチの技術	アウトリーチの意義と目的、必要性、機能、方法と留意点について理解する。	近年の地域を基盤としたソーシャルワーク実践の必要性の高まりのなかで、アウトリーチが必要とされてきている状況もふまえて内容を理解しましょう。
9	契約の技術	契約の意義と目的、方法と留意点について理解する。	ソーシャルワークの理念であるクライエントとの関係の対等性やクライエントの自己決定の尊重は、契約の考え方や方法を通して具体化されることを理解しましょう。
10	アセスメントの技術	アセスメントの特性、アセスメントで得るべき情報16項目と視覚化できるアセスメントツール、アセスメント面接で得た情報の使い方について理解する。	アセスメントがソーシャルワークのプロセスにおいて、最も重要な基本中の基本といわれている理由について理解しましょう。
11	介入の技術	介入の意義と目的、方法と留意点について理解する。	介入はミクロ、メゾ、マクロのシステムにかかわるものであること。留意点については、クリティカル・シンカーである必要性、およびエビデンス・ベースドの重要性について理解しましょう。
12	経過観察、再アセスメント、効果測定、評価の技術	経過観察、再アセスメント、効果測定、評価とサービス開発の内容について理解する。	子どもと家庭への実践事例を通して具体的にイメージしながら理解しましょう。
13	面接の技術	面接の目的、展開、面接において用いる技術とコミュニケーション、面接の形態について理解する。	会話と援助的面接との相違、面接の展開過程、必要な技術、生活場面面接の重要性について理解しましょう。
14	記録の技術	記録の意義と活用目的、種類と活用の仕方、方法と IT 化、今後の課題について理解する。	ソーシャルワーク実践において、なぜ記録は必要かつ重要であるのか、活用の仕方とともに理解しましょう。
15	交渉の技術	交渉の意義と目的、方法と留意点、プレゼンテーションの技術について理解する。	「エンパワメントの原則」の視点から意義について理解し、必要とされる技術について理解しましょう。

■レポート課題（手書きレポート用紙の p.1、p.9の課題記入欄は、「課題名」として表示されているものの記載で可）

1 単位め	**課題名：「相談援助の概念及び技術の必要性と活用のあり方」** 相談援助の概念を整理した上で、相談援助において「技術」を必要とする理由、およびその活用のあり方について論述してください。
2 単位め	**課題名：「ソーシャルワーク実践における対象理解の意味」** ソーシャルワーク実践において「対象を理解する」とはどういうことであるのか、あなたの意見を述べてください。 **※スクーリング受講者専用「別レポート」対象課題・web 解答可**

※提出されたレポートは添削指導を行い返却します。

■アドバイス

ソーシャルワーカーに必要とされる相談援助の価値・原則、相談援助の過程および相談援助の技術について「座学で学ぶ」ことの意義とは、何でしょうか？

以下の 2 点に留意して考えてみてください。

（「社会福祉援助技術論 A・B」に共通）

1．ソーシャルワーカーとして仕事をしようとする際には、いかなる実践の場においても「問題となる状況」を全体的にとらえ、可能となる活動の選択肢を広く検討し、思考し、さらに利用者・当事者や関係機関と連携して活動していく実践が必要とされます。

そして、その際には既存の相談援助の枠組みを駆使した支援のみならず、利用者・当事者の視点に立ち、場合によっては既存の枠組みを超えて制度やサービスの変革を視野に入れた支援に着手せざるを得ません。

換言するならば、ソーシャルワーカーは自己認識や内省性を高めつつ、利用者・当事者の存在そのものに関心を示し、既存の知識や理論に基づく枠組み（理解や思い込み）に囚われることなく、利用者・当事者の呈する「事実」や取り巻く「事象」について分析し、思考する方法と姿勢を修得できていることが求められているといえるでしょう。

教科書に記述されている内容（先行研究）に対しても、ただ単にそれを覚えるのみでなく、疑問や批判的な視点をもちながら学び、自らの見解を育んでください。

2．わが国においては、いわゆる「理論と実践の乖離問題」の一端として、「ソーシャルワークの理論を学ぶことによって培われるソーシャルワークに対するイメージ」と「現場実践を通じて培われるソーシャルワークに対するイメージ」の間に大きな“ギャップ”があることが指摘されています。

理論と実践をつないでいくことは難しい営みであるのかも知れませんが、しかしその 2 つは相対立するものではありません。「理論に支えられた実践の重要性」および「実践を支える理論の必要性」の双方を受け入れられるソーシャルワーカーでありたいものです。

本科目を通し、相談援助における理論、知識、技術等について「座学」で学んでいくわけですが、その「学びの眼差し」の先に利用者・当事者と呼ばれる人びとの暮らしと生のあり方を位置づけ、実践とのつながりの可能性を意識しながら学んでください。

どこに「顔」(学問的関心）を向けながら取り組むことが、ソーシャルワークについての意味ある「座学」学修となり得るのか？―そのような意識も頭の隅において頂けましたら幸いです。

1単位め アドバイス

「技術」は援助専門職としての実践をしていく上で“必要”です。しかし、それだけで“必要十分”であるとはいえません。では、その他に何が必要となるのでしょうか？

また、換言するならば、ソーシャルワーク実践をしていく上で「技術」の有する意味とは何であり、その活用に際して留意すべきこととは何なのでしょうか？　それはまた「知識」「価値・倫理」との関連においては、いかなる役割と意義をもち得るのでしょうか？

「相談援助」とは何であるのか？　および相談援助に必要とされる数々の「技術」には、どのようなものがあるのか？―について学び、理解した上で、「技術」が必要とされる理由およびその活用のあり方について、あなたの意見を述べてください。（テキスト『相談援助の理論と方法Ⅰ』第1～3章、第7～14章、および『相談援助の理論と方法Ⅱ』第9～10章、参照）

2単位め アドバイス

ソーシャルワークはその時々の社会情勢下で生起する社会問題や社会生活上のニーズに的確に応えていかなければなりません。近年、社会の不平等化や格差社会の問題が指摘されるようになり、「貧困」があらゆる福祉問題の根底にみられるようになり、生活問題はより複雑化、深刻化、多様化してきています。

しかし、この貧困問題にしろ、あるいは孤立、排除、差別の問題にしてもたえず存在してきたものであり、歴史的社会的に変化しながら再生産され、新たな形態を伴って進化してきていると解釈することもできるでしょう。

社会福祉およびソーシャルワークが今まで対象としてきた問題としては、具体的にどのようなものがあったでしょうか？　また、それらは時代社会状況の中でどのように取り扱われ変遷してきたのでしょうか？　また、近年において生起してきている、既存の社会福祉制度・サービスでは容易に対応しきれない生活問題、社会問題としてはどのような問題があるでしょうか？

また、ソーシャルワークが対象とする問題を「個人や家族の抱える生活問題が政治・経済・社会・文化等の要因によって規定されながら時代の変化の中で社会的課題となってきたもの」であるととらえたとき、ソーシャルワーカーとしての私たちの対象は、私たちのすぐそばにいる具体的存在としての利用者・当事者であるともいえます。

利用者・当事者を「自らの生活課題の解決のために他者からのかかわり・介入を必要とする人」であるととらえたとき、ソーシャルワーカーとしての「かかわり」「介入」のあり方が問われてきます。

その際に、人は見ようとするものしか見えないし、また問題は人びとによって意識され、認識され、名づけられなければ「生活・社会問題」とはならないということ。並びに、私たちソーシャルワーカーが知っていること、あるいは知っていると思いこんでいることが、必ずしもすべて真実であり正しいとは限らない場合が多いということに心を留めておく必要があるでしょう。

また、社会福祉サービスの合理化、システム化が進む一方である状況において、利用者・当事者という「生きた人間」そのものを全体としてとらえるような対象把握が弱まってきている現実を注視する必要もあるでしょう。

以上の点を踏まえた上で、ソーシャルワークが対象とする利用者・当事者とは、そもそもどういう人たちのことをいうのか？　あるいはソーシャルワークが対象とする「問題」とはどのようなものであるのか？　また、そのような対象を理解するために援助専門職に必要な姿勢・専門性とは何なのか？　さらにソーシャルワーク実践における「対象を理解すること」の意義について、あなたの意見を述べ

てください。（テキスト『相談援助の理論と方法Ⅰ』第１～４章、『相談援助の理論と方法Ⅱ』第１章、および参考図書『相談援助の基盤と専門職』第１～２章、第５～７章、第10～11章、参照）

■レポート作成に際しての留意点（「社会福祉援助技術論Ａ・Ｂ」に共通）

１．以下のような問題意識と姿勢をもって頂くことを望みます。

① 「レポートだから調べたことをそのまま書けばいいや」ということにはなりません。レポートは「小論文」の一種です。よってレポート課題として与えられたテーマに対して、“自分ではどのような視点で、どのように考えられるのか”を明確に伝えることが求められます。

「良いレポート」とは、ただ単に調べてまとめたものではなく、自分の考えていること（主張）が読む人に伝わるレポートのことをいいます。

② そのためには、教科書以外にも自分の見解を深める上で役に立ちそうな「文献」を手に取り、読むことが必要となります。

なお、その際に文献の示されている先行研究を無批判に受け入れ、体裁を整えたレポートを書くのではなく、疑問をもって先行研究を批判的に検討した上で、自分の考えを述べることを心がけてください。「自分自身の言葉」で「自分自身の考え」を述べることで「自分らしいレポート」が仕上がります。

③ また、“自分は何を言いたかったのか？　今はっきりとわかっていることは何であり、またわかっていないことは何なのか？　いったい自分は何を考えているのか？”―と、自分自身に対して問い直す作業を心がけてください。「推敲を重ねる」ことでその作業も進みます。

④ レポートは科目履修に伴う単位修得のためには必須のものですが、レポートはそのために仕方なく書くものではありません。「自分自身の考え方・思想を創りあげる」ために書くものです。大学での学修の本来の目的は、そこにあります。

２．以下の点に留意してレポートを作成してください。

① 手書きにしろワープロ・パソコン印字にしろ、論述表記（原稿用紙の使い方）の基本ルールを遵守してください。

② どこまでが文献を引用・参照したものであり、どこからが執筆者の独自の見解であるのかがはっきりとしない場合、そのレポートは全体として「盗作」であると疑われるおそれがあります。ましてや教科書の文章をそのまま書き写して列記しただけのものは論外です。

③ 引用・参考文献の出典表記と注釈の表記方法には、一般的に「従来型」と「近年型」の２つがあります。どちらがいいかは一概にはいえませんし、決して統一されてもいませんが、『学習の手引き』や「文章作成法」関係の本などを参考にして基本的な表記法についてご修得ください。また、文献の引用・参考に際しては直接引用、言い換え、要約などについて正規のルールがありますので、ご修得ください。正規の表記法を用いることで、そのレポートの説得性と信頼性も高まります。

従来型：注釈も参考・引用文献も一緒に、本文中に通し番号の小さな肩数字をつけて表記し、章末や巻末（論文末）にその通し番号順に一括して表記する。

近年型：注釈は（注１）のように本文中に括弧つきで大きく表記し、参考文献も本文中に著者名・発表年のみを括弧つきで（川口、2008）のように表記する。

引用文献は引用分末尾に著者名・発表年・引用箇所を括弧つきで（川口、2008、p.123）

のように表記し、章末や巻末（論文末）に注釈と引用・参考文献一覧とを別々に記載する。

④ 「文献」には、主として単行本としての「図書」と、逐次刊行物としての「雑誌論文」があります。ソーシャルワークの領域でどのような文献があるのか、知っていますか？　必要に応じて把握し、活用していってください。

⑤ 文献検索の方法としては、大別して「イモヅル式検索法」と「二次資料検索法」があります。それぞれに長短がありますので、併用することが望ましいです。なお、インターネット検索を利用しての執筆には特別の注意が必要ですのでご留意ください。

イモヅル式検索法：一つの文献（本や論文）の巻末などに記載されている「引用・参考文献」の中から重要と思われるものをピックアップし、そこから次々と文献をたどっていく方法。

二次資料検索法：分野ごとに集めた文献データベース（文献目録、インターネット、CD-ROM）を用いて文献・資料を集める方法。

⑥ 引用・参考文献の出典表記と注釈の表記方法、および文献探索の方法をはじめ、レポートや論文を書くときの基本的ルールや心構えについては、以下の本にわかりやすく記述されていますので、ご参照ください。

小笠原善康『大学生のためのレポート・論文術』講談社、2002年

なお、インターネットを使ってレポート・論文を書く際の方法、留意点については、以下の本をご参照ください。

小笠原善康『大学生のためのレポート・論文術―インターネット完全活用編―』講談社、2003年

■科目修了試験　評価基準

1）各出題に含められているポイントすべてについて論述されていること。

2）ポイントに関して教科書のなかで説明されている内容を理解していること。

3）論理構成と展開が明確であること。

4）記述の分量（1問あたり400～800字程度）が確保されていること。

■「卒業までに身につけてほしい力」との関連

とくに「基礎的知識」「レポート作成力」「自己管理力」「倫理観」を身につけてほしい。

■参考図書

社会福祉士養成講座編集委員会編『新・社会福祉士養成講座 6　相談援助の基盤と専門職（第 3 版）』中央法規出版、2015年（第 3 版でなくても可）

浦河べてるの家『べてるの家の「非」援助論―そのままでいいと思えるための25章―』医学書院、2002年

加茂陽編『ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために―ソーシャルワークの最新諸理論・事例・議論―』世界思想社、2000年

北川清一・久保美紀編著『社会福祉の支援活動―ソーシャルワーク入門―』(シリーズ・ベーシック社会福祉②)、ミネルヴァ書房、2008年

社団法人日本社会福祉士会編『改訂社会福祉士の倫理―倫理綱領実践ガイドブック―』中央法規出

版、2009年

仲村優一・一番ケ瀬康子・右田紀久恵監修、岡本民夫・田端光美・濱野一郎・古川孝順・宮田和明編『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規出版、2007年

※鳥瞰図的な視野から社会福祉学研究の現状と将来展望を示した書。高価な本なので大学図書館などで閲覧してみてください。

以下の雑誌論文、学会誌などをレヴューしますと、レポート課題、本科目の学修に際して参考となる先行研究を知ることができますので、調べてみてください。

『ソーシャルワーク研究』(相川書房)　『社会福祉学』(日本社会福祉学会)

『社会福祉研究』(財団法人鉄道弘済会)　『月刊福祉』(全国社会福祉協議会)

その他、スクーリング時にも講義内容に合わせ、適時、紹介します。